

ニューガラスの発展をめざして

日本板硝子株式会社取締役社長 中島 達二



先頃出されたニューガラス産業動向調査報告によれば、昭和61年度のニューガラス出荷総額は約2500億円強、昭和64年度には約3900億円になる見込みで、現時点では約3000億円と推測される。ニューガラスという言葉が出来て3年経ち、混沌の中からようやく一つの産業の芽が育ち始めた。

この産業動向調査によるとニューガラスフォーラム百十数社の内出荷業者は53社となっている。あとの50数社はユーザー業界及びニューガラス産業への新規参入を考えて研究開発中の企業と言うことであろう。またニューガラスの用途としては、光機能性分野が最も多くこれと電子電気機能分野を加えると73%にもなる。現在の段階ではニューガラスは、主としてオプト・エレクトロニクスの分野でその機能を期待されて成長しつつある新機能材料であるとも言える。オプト・エレクトロニクスの分野は今後引き続き情報化社会の進展と共に発展が予想されている。

一方、バイオ関係等光機能性材料以外の分

野では、将来に大きな期待を持たれつつ、なお研究開発に長期間を要するテーマが多い。この分野では産学共同研究などを含め地道に基礎研究を積みあげ新材料の創生に向けて裾野を広げていく必要が感じられる。

いずれにせよ、ニューガラスの進歩は我々が努力を続ける限り約束されているといえよう。

ニューガラスフォーラムの成立には二つの意義があったと考えている。一つはガラス関係業界をまとめたことである。フォーラムが出来る前、日本のガラス業界は、板硝子は板硝子協会、硝子繊維は硝子繊維協会、壺硝子は壺硝子工業会と言うように製品毎に工業会を作り、相互に対話する機関がなかった。

近年、硝子製品工業会は可成りのガラスメーカーを会員とするようになったが、大企業主体の板硝子協会、硝子繊維協会についてはほとんど交流がなかった。そのため業際的な分野の研究開発についてはガラス業界はかな

り遅れを取ったと思われる。この様な時期に於けるニューガラスフォーラムによる大集合は、日本のガラス工業の歴史を考えると画期的な意義を持つものであろう。また、世界的に見てもコーニング、ピルキントン、ショット、ピーピージー、サンゴバンと言う世界の代表的なガラスメーカーを会員に集めた団体は多分初めてではないだろうか。このようにニューガラスフォーラムの意義は設立当初には発起人には考えられなかった時代的な背景を担って広がり、大きくなってきたことを感じる。

現在フォーラムは特別会員として少数の学者先生をお迎えしているが、ニューガラスの広がりと共にガラスに関心を持つ学界の方々も広がっているの、なんらかの方法でニューガラスという見方で、全員集合を考えて見ることも面白いのではなかろうか。

あとの一つはガラスをハイテク新素材としてイメージアップしたということである。今の世の中は、言葉の世の中である。ニューガ

ラスという言葉もようやく一人歩きを始めた。この新しい言葉が順調に成長し、言葉だけでなく大きく実りのあるものに育つことを期待したい。

そのためには産・官・学の協力が特に大切になると考える。なかんずくニューガラスの生みの親である通商産業省には、共同開発のプロジェクトを多方面で進めていただき、多くの会員がニューガラスの研究開発についてリスクを越えて邁進出来るよう一層の援助助成をお願いしたい。と同時に会員は自助努力を忘れず、学界の方々の協力を得て研究会を盛んにするなど、フォーラムでの多方面の勉強の中からオリジナリティを発揮出来る分野を定め研究開発を進めて行くべきであると考えている。

最後にフォーラムの運営について、専務はじめ事務局の方々が大幅努力されてここまで積み上げて来られたことにお礼を申し上げます。